

主 題：すべては福音のために1

聖書箇所：コリント人への手紙第一 9章15-18節

私たちクリスチャンは罪でないことなら何でも行うことが許されています。しかし、自由が与えられたからと言って、罪でないからと言って、何をしてもいいではありません。私たちはまず、これを行うことが神のみこころに適っているのか？神に喜ばれることなのかどうか？神の栄光を現すことかどうかを祈って考えることが必要です。そしてその次に、これを行うことが兄弟たちの徳を高めることなのかどうか、彼らのつまずきにならないかどうかを同様に祈って考えることが大切です。

パウロがIコリント10：23で教える通りです。「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。」、これらのことを考慮しながら選択していきなさいと、これがクリスチャンの自由なのだ。と私たちは学んで来ました。パウロは8章で、偶像にささげた肉を食べても構わないと言った上で、しかし、もし、そのことによって偶像にささげる肉を食べることに抵抗を覚える、まだ霊的に弱く成熟していないクリスチャンたちにつまずきを与えてしまうのであれば「私は食べない」と言いました。

また、9章では、パウロは教会からの金銭的支援を受ける権利があることを教えた上で、そのことが福音宣教につまずきを与えることになるので、「私は受け取らない」と教えていました。なぜ、パウロはこのようなことを言ったのか、すでに学んだように、信仰の働きを手段として私腹を肥やしている人たちがいたからです。金のために働きをしていた者たちがいたのです。パウロはそのことを知っていました。そこで、教会からの支援を受け取ることは当然の権利ではあるけれど、コリント教会ではそれをするのは福音宣教のつまずきになるので、私は受け取らないとしたのです。

だから、何をしても構わないけれど私たちはこのようなことを考えながら選択をすることが必要だ、それが私たちに与えられた自由だとパウロは教えたのです。今、私たちが見て来たことをパウロはガラテヤ人への手紙でこのように教えます。5：13「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」と。自由が与えられているけれど、それを正しく賢く用いるように、愛をもって仕え合っていくようにとそのように教えました。そして、そのように実際に生きていたパウロの証を今私たちはみことばを通して学んでいるのです。

今日見ていくのは9：15からです。この後パウロは再び「報酬を得る権利」という当然の権利をなぜパウロが行使しなかったのかという、その理由を記しています。働き人がその群れにいて支えられること、支援されることは当然だと。しかし、パウロはその権利を敢えて用いようとしなかった、なぜか？その理由をパウロはここで教えるのです。今日は15-18節までしか見ることが出来ませんが、少なくとも、ここを見たときに、私たちの宣教へのチャレンジになると確信しています。

☆パウロが当然の権利である「報酬を得る権利」を行使しなかった理由

A. パウロの誇り 15節

15a節「しかし、私はこれらの権利を一つも用いませんでした。」、このことはすでに見て来ました。しかも、この15節の初めの「私は」ということばを強調しています。これはパウロ自身の選択だから、こうしなければならないと言うのです。彼はこの教会のことをよく知っていたし、人々が何を考えていたのか、何を見ているのかをよく知っていたパウロはそれを踏まえた上で、「私はこのような選択をした」とそのことを強調するのです。パウロが彼らから支援を求めなかったのは、教会の中にまだ信仰的に弱い人たちがいたからです。

しかも、このように続きます。15b節「また、私は自分がそうされたくてこのように書いているのでもありません。」と。パウロがこの手紙を書いてまたこのことを話しているのは、彼の心の中に支援を求める思いが全くないこと、そのような目的で手紙を書いたのではないということを改めて強調するのです。

15c節「私は自分の誇りをだれかに奪われるよりは、死んだほうがまだからです。」と続きます。パウロが言わんとする何でしょう？ここにある「誇り」ということばは「自慢、誇りの理由、誇りの根拠」を意味することばです。ある祭司たちのように、信仰を金儲けの手段に使っていると思われること、そのようなことが決して起こらないために、もう何度も見て来たように、パウロは支援の受け取りを拒否したのです。これがパウロ自身の信念だったのです。これがパウロ自身の誇りだったと言うのです。特別のことを言っているわけではありません。パウロ自らが選択したコリント教会の人たちから金銭的支援を受けないということ、それが彼の誇りだったと。このことを彼はある意味では自慢していたのです。そのような生き方を選択することによって、誤解をもたらす可能性を全く除こうとしたのです。「パウロは

金のために働きをしている」とだれも思わない、このことをパウロは自慢したのです。

Ⅱコリント 11：10「私にあるキリストの真実にかけて言います。アカヤ地方で私のこの誇りが封じられることは決してありません。」「アカヤ地方」とはコリントの地域です。この前の9節にはこのようにあります。「あなたがたのところにて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニヤから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたのです。私は、万事につけあなたがたの重荷にならないようにしましたし、今後もそうするつもりです。」と。つまり、見て来たように、コリントの教会から金銭的なものを受けをしないということです。そして、10節にそれが私の誇りだと、ここにもパウロは記しています。コリントの教会のだれの負担にもならないと、それが彼の自慢することだったのです。

そこでパウロは言います。「自分の誇りをだれかに奪われるよりは、」と、この「奪われる」と訳されていることは「内容・意味・力・効果を失わせる、無効にする、台無しにする」ということです。15節の脚注には直訳として「むなしくされるよりは」とあります。新改訳2017年版では「それを用いるよりは死んだほうがましです。私の誇りを空しいものにするには、だれにもできません。」と書かれています。どちらかと言うと、原語に近いのは第2版の方だと思いますが、ただ分かり易く2017年版ではそのように訳しています。

パウロは何を言いたかったのか？もし、自分の宣教の働きが金のためにやっていると思われるのなら、そのように人々に思われるのなら、それはまさに彼の誇りを空しく台無しにされることになる。それなら私は「死んだほうがましだからです。」と言うのです。つまり、自分は神の前に何が正しいのかを考え、愛する教会の人たちのつまずきにならないために、敢えて彼らからの金銭的なものを受け取らないという決心をした、その選択をした、それが彼の自慢すること、誇りだったのです。この「自分の誇りを台無しにする」、つまり、だれかが「あんなことを言っているけどパウロは金のためにやっているのだ」とそのように言われるのなら「死んだほうがましだ」と言っているのです。こうしてパウロが言いたかったことは、パウロは心の底から金のためにこの働きをしていなかったということです。彼は主のためにこの働きをしていました。そのことはこの後にも書かれています。

だから、こうして15節で「金が欲しいからこんなことを書いているのではない。私はこのような選択をして生きて来た。それが私の誇りだ。だれかが事実でないことをもってそれを台無しにするようなことがあれば私は死んだほうがましだ。なぜなら、私はそんなことを全く考えていないしそのように生きて来なかった。これからも生きない。」とパウロは記しているのです。ですから、パウロにとって福音を伝えることは生活の糧を得るための手段ではなかったのです。

B. パウロの働き 16節 : パウロにとっての福音宣教とは？

だから、16節でこのように言います。「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったなら、私はわざわざいだ。」、こうしてパウロは金のためにこの働きをしていない、「どうしても、しなければならぬことだ」と言います。この後パウロは、主が彼を召してくださったこのすばらしい働き、福音宣教という働きについて、彼はどのようにこの働きを捉えていたのか、その説明をします。「私は主が与えてくださった働きをこのように捉えている」と、彼は四つのことを教えています。

1. 自分を誇示するための道具ではない 16a節

「それは私の誇りにはなりません。」と述べています。パウロにとって自分が為して来た働き、福音を熱心に人々に伝えて来たこと、様々なところを訪れて福音を伝える働き、それは自分の自慢ではなかったということです。どれだけの人に語ったのか、どれだけの場所で語ったのか、確かに、パウロはそのようにしたのですが、それは人に自慢するものではないと言うのです。

確かに、私たちの周りには、自分が為して来た働きや自分のその熱心さを自慢するような人がいないわけではありません。何人かの人を救いへと導いたとか、いくつの教会を建てたとか、こんなにも多くの働きをしている、こんなふうには私は用いられていると、そのようなことを自慢する、それは大きな間違いです。なぜなら、私たちより遥かに多くの働きを為し、多くの人々に影響を与えたパウロはそのようなことをしなかったからです。パウロが誇りとしていたことは「ただ一つ」とパウロ自身が言います。ガラテヤ6：14「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してありません。…」彼の誇りはそれでした。自分が何をやるかなどはいつでもよかったのです。

もう一つ言うなら、彼自身が分かっていたことは、この自分が為しているすべての働きは、神があわれみをもって神の恵みのうちに為されるわざであって、私自身の働きではないということです。私たちもそのことをしっかり覚えておかなければ、栄光を受ける方は神だけなのに、その栄光を横取りしてしまうことになるからです。感謝なことは、私たちのようなものを神は用いてくださるということです。私たちを使ってみわざを成してくださるのです。パウロは大変な働きをした人物です。コリント教会を始めたのはパウロでした。彼の記した手紙のいくつかはこの聖書の中に残っています。しかし、彼は

言います。主が私に与えてくださった働きは自分を誇示するための道具ではないと。

ですから、私たちクリスチャンが「こんなことをした！」などと自慢し合っているのは愚かなことです。私たちはその働きを可能にしてくださった神を心から誉め称え続けていくのです。

2. 彼にとっての喜びである 16b節

この働きは自分にとっての喜びだと言います。16節に「そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。」とあります。つまり、私に与えられた「福音宣教」はどうしてもしなければならぬことだと言うのです。避けることができないこと、これは私にとって「must」だ、どうしてもやらなければいけないことだと、このことばは新約聖書中に17回出て来ます。あたかも、強制的にと言うようです。

ちょうど、預言者エレミヤの祈りがエレミヤ書に記されています。大変興味深いことを彼は祈っています。20:9「私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。」「私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい」と思いましたが、」とありますが、なぜ、彼がこんなことを思ったのか？エレミヤは人々に神のメッセージを語ったのですが、人々は彼のことを嘲ったのです。どんなに熱心に忠実にエレミヤが人々に神のメッセージを語っても、彼が受けた報いは侮辱でした。なぜなら、警告してもしてもいつまで経ってもそれが実現しないからです。そこでエレミヤ自身が思うのです。「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい」と。

でも、そのときに何かが起こるのです。「主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。」と、みことばが「燃えさかる火のようになり、」もうこれ以上留めて置けないと。お気づきになりますか？エレミヤは失望したのです。人々の前で神のさばきを語っても人々は悔い改めようとしません。もういいや！と、しかし、彼の心の中からメッセージを語り続けていくというその熱い思いが出て来て、彼は語り続けたのです。いやいや語っていたのではありません。確かに、失望することばかりだったでしょう。でも、彼の心の中から熱い思いが出て来て、「私はこのメッセージを語らなければいけない、私はこのメッセージを語っていきたい！」とその証をするのです。彼の内側からこの行動へと彼自身を駆り立てていくもの、それがうちにあったのです。

*パウロの証

パウロもそのように言っていますか？彼も福音を宣べ伝えることは私がどうしてもしなければならぬことだ、避けることが出来ない。だからと言って彼は喜びもない感謝もない状態でそのことをしなければならなかったのか？仕方ないからしましょう…、そんな思いをもっていただけではありません。彼のうちにはこのメッセージを語りたい、このメッセージを自分のうちに留めて自分の口を閉ざして人々に語らないことなど有り得ないと。内側から熱い思いが出て来るのです。パウロはそのことをこのように言っています。ローマ1:14「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならぬ負債を負っています。」と。福音宣教のことをパウロは「返さなければならぬ負債」と呼んでいたのです。なぜなら、「返さなければならぬ負債」というのは「どうしてもやらなければならぬこと」だからです。返さなければならぬのです。

先にも触れましたが、パウロは義務感からこの働きをしていたわけではありません。今日のテキスト9:16の最後を見てください。「もし福音を宣べ伝えなかったなら、私はわざわざに会います。」と。17年版は「わざわざです。」と書かれています。「わざわざ」とは「痛み、不快、悲しみを表す声」です。悲痛がもたらす「声」なのです。「ああ！」とか…。ですから、パウロはここで、もし、私が福音を宣べ伝えなかったなら、それは私にとってどのようなものを語ったのです。それは「私にとって大変な悲しみ、痛み、不快だ。この悲しみが私の内側から「声」となって出て来る。」ということです。ということは、逆説なら、パウロにとって「福音宣教は喜び」だったのです。確かに、彼は福音を宣べ伝えなかったなら私の心は大変な苦しみだ。でも、伝えることで私の心は喜んでいけるというのです。

私たち信仰者も、主によって忠実さを求められていることを私たちは知っています。「主に對して忠実でありなさい。主の教えに忠実でありなさい。」と。問題は、それをどのような心で行っているか？です。多くの皆さんはみことばに忠実に従おうとしておられます。ですから、あなたの信仰生活は罪の告白の連続です。現実の問題としてそのことを私たちは抱えていて、そして、それを告白しながら生きています。そうして何とか神が言われるように歩んで神を喜ばせていきたい、何とか神の栄光を現していきたいと、そのように思って歩んでいます。でも、よく考えなければいけないこと、また、いつも覚え続けなければならないこと、問い続けなければいけないことは、「どんな心でこの行いをしているか？」です。与えられた働きを頑張ってやろうと努力してやっていたなら結果として喜びが与えられるのか？そうではありません。自分で頑張ることによって神が望んでおられるように生きたなら、神は喜びを与

えてくださるのか？そうではありませんね。このような生き方は自分の努力で喜びを勝ち取ろうとしていることです。信仰生活はその逆です。

パウロにとって主から与えられた働きを忠実に行うことが喜びでした。なぜなら、彼は日々神に喜ばれる生活をしてきたからです。何度も私たちが学んで来たように、「喜びは神からの祝福であり神からのギフト」です。パウロは日々主のみことばに従い聖霊なる神に満たされ導かれて歩んでいました。なぜなら、彼がこのように歩んでいたからこそ、彼の心は日々喜びに満たされ、そして、与えられた働きを忠実にやり続けていくことができたのです。

だから私たちが「神がこうしなさい」と言われることを自分の努力で一生懸命頑張ったら、神から褒美をいただいて私の心は喜びで満たされるのか？今話したように「逆」です。あなたが神にすべてを明け渡して、神があなたの心を支配して、あなたの思いも考えもすべてを支配されるときに、神はあなたのうちに喜びをくださるのです。そのようにあなたが歩むときに、あなたは何をするにも喜びをもって主に従い続けていくことができるのです。ですから、パウロにとって、福音を伝えるという神が与えてくださった働きは彼の喜びだったのです。私たちも自分が神からいただいた働きを考えると、私たちはそれを喜びとしているのでしょうか？信仰者として生きていくこと、信仰者として神に仕えていくこと、それらすべてがあなたにとって喜びかどうかです。そのことはこの後17節にも出て来ます。

3. 主からゆだねられたもの 17節

三つ目にパウロが言うことは「この働きは主から私にゆだねられたものだ」ということです。17節「もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがありましょう。しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだねられているのです。」、パウロはまたここで「報い」について話しています。

・「報い」について : この「報い」とは「当然支払われるべき賃金」です。報酬のことです。私たちはクリスチャンとして、救いに与った者として新しい人生を歩み始めました。最終的にその人生の評価が神によって下ることを知っています。私たちはみな神の前に立つのです。そこで神からの報いをいただくのです。マタイ16:27に「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。」と書かれています。皆さんがよくご存じのⅡコリント5:10にも「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」とあります。私たちは必ずいつか神の前に立つのです。イエスの救いを拒み続けた人たちも立ちます。でも、彼らは自分の罪が明らかにされて永遠のさばきを受けます。でも、私たち救われている者はさばきから完全に解放されさばきに遭うことはありませんが、信仰者としての歩みに対して神からの報いを受けるのです。ですから、

*大切なことは「自発的な心」で主に仕えているかどうか！

このことを考えなければいけないのです。この「自発的」ということばは「心から進んで行く」という意味です。ですから、パウロが言うことは、もし、私がこのことを自発的にしているなら報いがあるでしょう、いやいやでなく喜んでするなら…。奉仕とはみなそうです。人から強制されてするのではなく、自分から進んでやっていこうとします。なぜなら、それが神に対する自らのささげ物だからです。神への感謝の現れです。私たちは奉仕に対して働きに対して、パウロが言うように心から本当に主に仕えているかどうかです。もしかすると、私たちは人の目を意識してやっている可能性があります。

皆さんも思い出してください。「山上の説教」の中で主イエスはこのように教えておられます。マタイ6:1、2、5、16「1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」、人に見せるためかそれとも神に見ていただくためか？この後、人の目だけを意識して人からの称賛を求めている者たちへの警告が続いていきます。そのことが記されているのはそういう人たちがいたからです。「2 だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。…:5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。…:16 断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」

このように彼らは「施し」「祈り」「断食」を神を覚えてしているのではなく、人の目を意識してやっていたのです。ですから、このそれぞれの箇所最後は同じことばが言われています。「彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」と。彼らが望んだのは神からの称賛ではなく人々からの称賛だったからです。そこでイエスは言われたのです。彼らが求めているものはもう彼ら自身が手に入れたと。人々は「施し」をしている人を見て「本当に慈悲深い人だなあ」と言ったでしょう。人々は長く祈っている人を見て「あの人は本当に信心深い人だ」と思ったかもしれないし、断食している人に「あの人は本当

に信仰的だ」と思ったかもしれません。そういう人からの称賛を求めている彼らはもうそれを得たのだと言うのです。

問題は、神がそれを喜んでおられるかどうかです。だから、パウロはここでも

* 「心が大切である」と教えた

パウロは「ささげ物」の話をしたときにこのように言っています。Ⅱコリント9：7「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してください。」と、「喜んで与える人」、問題は「心」だと言います。ささげ物をするに当たっても私たちがそれを心からするのかどうかです。神を愛するゆえに、神に感謝をするゆえに、私たちは残り物ではなく、喜んで犠牲的にささげようとしします。だれにも見られません。神への感謝がそのような行為を生み出しているのです。

・「務め」とは： 17節「しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだねられているのです。」、もし、自発的でなかったとしても大切なことは何も変わらないということです。自分には主からの「務め」が与えられていると言います。問題はそれをどのように果たしていくかであって、心から果たすことが神の前にふさわしいこと、喜ばれることだと。でも、そのようにしていないとしても主から務めが与えられているこの事実は変わらないということです。「務め」とは「管理、責任」という意味をもったことばです。特に、家庭において金銭や特別な責任を任された信頼ができる忠実な「しもべ」に与えられた任務を意味しているのです。みことばを見てください。コロサイ1：25「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」、エペソ3：2「あなたがたのためにと私がいただいた、神の恵みによる私の務めについて、あなたがたはずでに聞いたことでしょう。」

・「ゆだねられている」とは： その後に「ゆだねられている」と続いています。このことばは「信じる、信頼、委託する」という意味があります。つまり、パウロはこの福音宣教の務めを主からいただきましたが、彼はこの務めに付随する責任の大きさを知っていました。神はただ「これをあなたに任せたと」言われるだけでなく、その務めに忠実であることを神ご自身が期待しているということです。パウロはこの務めを神からいただいた、大切なすばらしい責任を神からいただいた、そして、神はちょうど家庭において特別な責任を任される信頼できる忠実なしもべのように、私にこの任務をくださったと言うのです。そして、そこには神の私に対する期待があった、神は私を信じてくれたと言うのです。

だから、このことを分かっていたゆえに、見て来たように、Ⅰコリント4：1、2でこのように言うのです。「1 こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。2 この場合、管理者には、忠実であることが要求されます。」と。まとめるとこういうことです。神はあなたにすばらしい働きを与えられました。それがどんな働きであっても、パウロには福音宣教という特別な働きが与えられました。パウロはこの働きを神からいただいたことをよく知っていました。でも、どのような働きかを分かっていただけでなく、神がどんな思いをもってこの働きを私に託してくださったのか、そのことも分かっていました。神はこんなどうしようもない私を忠実なしもべと見てくださった、こんな私に神は期待しておられると。もちろん、これはパウロが意志が強かったからとそんなことを言っているわけではありません。

信仰者がどのように信仰生活を生きるのか？皆さんはご存じですね。すべてのカギは力である神に頼って生きることです。パウロはそうのように生きたのです。だから、パウロがすごかったのではなく神がすごかったのです。神は私たちにそれぞれすばらしい働きをくださった。私たちが覚えることは、このような思いをもって神が私たちにくださった、私たちのことを信じて期待して下さっているということです。それが分かれば私たちはその働きを果たしていくために、神の助けが必要だと分かって、いつも神の助けを求めながら生きていこうとします。パウロはそうように生きたのです。

パウロはそのことを知っていたのです。ですから、パウロはどんな報いをいただくのか？どんなご褒美をいただくのか？そのことを考えながら信仰生活を生きたものではありません。彼は確かに信仰者として主に忠実に従っていました。でも、彼のその忠実さの動機は「何が得られるか」ではなかったのです。私たちは違いますね。私たちは「これをしたら何がもらえるのか？」とそのことが聞きたいです。どんなものが貰えるのかによってそのことをするのかどうかを決める…、パウロは違いました。だから、パウロにとって、この主が与えてくださった働きそのものが彼への報いだったのです。

4. 主からの報酬である 18節

18節「では、私にどんな報いがあるのでしょうか。」と、報酬、褒美のことです。このように聞くと、私たちはこの後に「多分こんな報酬を、こんな報いを神からいただくことになります」と、考えられる報酬が列記されているかと思いますが、そんなものは一切記されていません。

・「報いとは」： 見てください。「それは、」という接続詞です。これは説明を表すのです。つまり、

パウロが「私にどんな報いがあるのでしょうか。」と言って、その説明がこの後に続くことを意味しているのです。「それは、」の後に書かれていることが彼自身が信じていた主からの報いのことなのです。どんな報いがあるのだろうか？私にはこんな報いがあると18節で教えます。「それは、福音を宣べ伝えるときに報酬を求めないで与え、福音の働きによって持つ自分の権利を十分に用いないことなのです。」と、また、出て来ました。パウロはここで再び言います。この福音宣教の働きをコリント教会からの報酬なしで行うこと、報酬をもらう権利があるのにその権利を用いないで福音宣教をするということ、それが私の報いだと言います。

では、どうしてこれが報いなのでしょう？それは「この働きにはすばらしい祝福が含まれている」ことです。どんな祝福か？パウロはこのように歩むことによって、彼は金のために働いていないという、そのような思いのもと福音宣教の働きができるということです。パウロはお金を受け取らない選択をしそのことを決心しました。それによってどんな誤解にも惑わされることなくこの福音を語り続けることができるのです。また、救いの祝福に与れる。パウロはこのすばらしい働きをいただき福音を語り続けました。そして、この働きを通して救いに与る人たちが起こされるのです。そのときに彼自身もすばらしい祝福に与ることができるのです。Iコリント9：23を見てください。「私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。」

福音の働きをし、罪人がその罪を悔い改めて主イエス・キリストを信じるときに、天において天使たちが喜ぶように、パウロもその場にいてともに神に感謝をささげるのです。その祝福がそこに含まれているのです。また同時に、喜びと満足がそこには伴っています。確かに、天に上がればそこには報いがあることを知っています。私たち信仰者はこの地上において為した働きに応じて、つまり、主に対して忠実であったかどうかに応じて、ふさわしい報いをいただくのです。そのことを私たちは知っています。しかし、この地上にあってもすばらしい報いがあるとパウロは言うのです。日々聖霊なる神によって心が満たされ、主のみことばに従う者は主の喜びに満たされて行きます。パウロはその喜びを日々経験している人でした。なぜなら、先ほども見ましたが、喜びは私たちが頑張る手にするものではないからです。これは神からの贈り物、ギフトです。

シュアハ人ビルダテがヨブに対して間違ったことを言いました。「ヨブよ、あなたがこんな苦しみを経験しているのはあなたが神の前を正しく生きていないからだ」と。後に彼は他の二人の友とともに神によって責められます。でも、彼が言ったことにも真理があります。ヨブ記8：21「ついには、神は笑いをあなたの口に満たし、喜びの叫びをあなたのくちびるに満たす。」と。つまり、彼は主が喜びをくださると言っているのです。これは正しいことです。日々主の喜びに満たされ感謝に溢れ満足に満たされながら歩むことができる、これも主が与えてくださる報いなのです。ということは、今、私たちはこんな祝福をいただきながら歩むことができるのです。

ダビデもこのように言っています。詩篇4：7「あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。」と。あなたは私の心に喜びをくださったと…。主が与えてくださる喜びと満足はいかなる豊作にも優る。どれほどの豊作でもそれより遥かに優る喜びが主によって与えられると…。何という幸いでしょう！私たちクリスチャンは…。主によって救われただけでなく、この地上にあっても主に仕え主に用いていただけるのです。そして、私たちのような者に神はこんな祝福を与えてくれるのです。

パウロはこの祝福をもって歩んでいたのです。もうこれで十分だと。ですから、パウロは「私にどんな報いがあるのでしょうか？私は神の前で決めたように、だれのつまずきにもならないようにこのように歩んでいく」と言いました。そして、その歩みに対して神はすばらしい報いをこの地上で与えてくださっていると。ですから、パウロは神から与えられたこの働きに対して、まさに、これこそが神が私にくださった報いなのだ、その働きの中に彼はすばらしい主からの祝福を覚えたのです。

このようなパウロのすばらしい歩みを見たときに、私たちは圧倒されます。なんというすばらしいクリスチャンだったのだろう、言い方を変えると、何というすばらしい人生をパウロは生きたのだろうと。すばらしいあなたへの知らせは、あなたもこのように生きることが出来るということです。私たちに大切なことは、そして、パウロが実際に歩んだ歩みというのは与えられたこの日をどのように歩んでいくか？です。あなたが主の前を正しく歩むなら、パウロがいただいたその祝福をもって生きることができるのです。私たちは自分の働きを人々に自慢するために主に仕えるのではありません。主に仕えること自体が、主のために働くこと自体が喜びなのです。そして、その働きを為すときに私たちが分かっていることは、これは神が私のようなものを信じて、私のような者に期待を置いてこの働きをくださったということです。そして、それを実践するための助けをもうちゃんと備えてくださっているのです。

そして、この主に従っていくときに、天国を待たなくてもいいのです、この地上にあってもすばらしい報いを経験しながら生きていくことができると言います。困難もあるでしょう。辛いこともあるでしょう。

う。悲しいこともあります。でも、その中でも私たちはこのような祝福をもって生きることができるのです。パウロはそのように生きたのです。願わくは、皆さんひとり一人がこのパウロの歩みから「私もこのように生きていきたい」というその決心をもって今日からの歩みを為していかれることを期待します。感謝なことは、神は私たちの弱さを分かってくださり、そして、こんな私を神はお使いくださるということです。主の助けをいただきながら、与えられた一日一日、主に喜ばれることを願いながら主のみことばに従っていきましょう。